参考資料２

未来を描こう、県民の城

福井城址活用検討懇話会「提言書」

1　提言の主旨

■「県都デザイン戦略」等との関係

福井県と福井市は、平成２５年３月に県都のまちづくりの指針となる「県都デザイン戦略」を共同で策定した。目標年次を２０５０年と定め、福井国体（２０１８年）と北陸新幹線福井・敦賀開業をそれぞれ短期、中期の目標年次として、福井駅周辺の都市基盤を整えてきた。

「県都デザイン戦略」においては、「歴史を受け継ぎ、新たな文化を創造する県都」を目指す姿とし、「福井城址を中心とした、歴史を象徴し、人が集まる空間の形成」を図るという方向性のもと、福井城址と中央公園およびその周辺エリアは、長期目標として、県庁舎、市庁舎を移転・再配置し、「歴史を偲ぶ空間」、「憩いの空間」、「活動・文化の空間」の３つの機能を持った、歴史を象徴し、人が集まる中心となる「福井城址公園」として整備することが謳われている。

これまで福井城址内においては、平成２０年に復元された御廊下橋との連続性を活かした山里口御門が復元され、城址西側の中央公園は、御座所など埋もれている遺構を活かし開放的な公園として再整備された。また、福井駅と城址をつなぐ市道県庁線の整備や堀端の城址周辺道路の整備など、歴史を感じられる整備も行われた。その結果、中央公園でのイベントの開催や市道県庁線の歩行者空間へのキッチンカーの出店など、公共空間を活用した新たな取組みが活発に行われるようになってきており、今後も「県都デザイン戦略」の方向性に合った施策を進めていくことが重要である。

「県都デザイン戦略」における福井城址周辺の整備方針

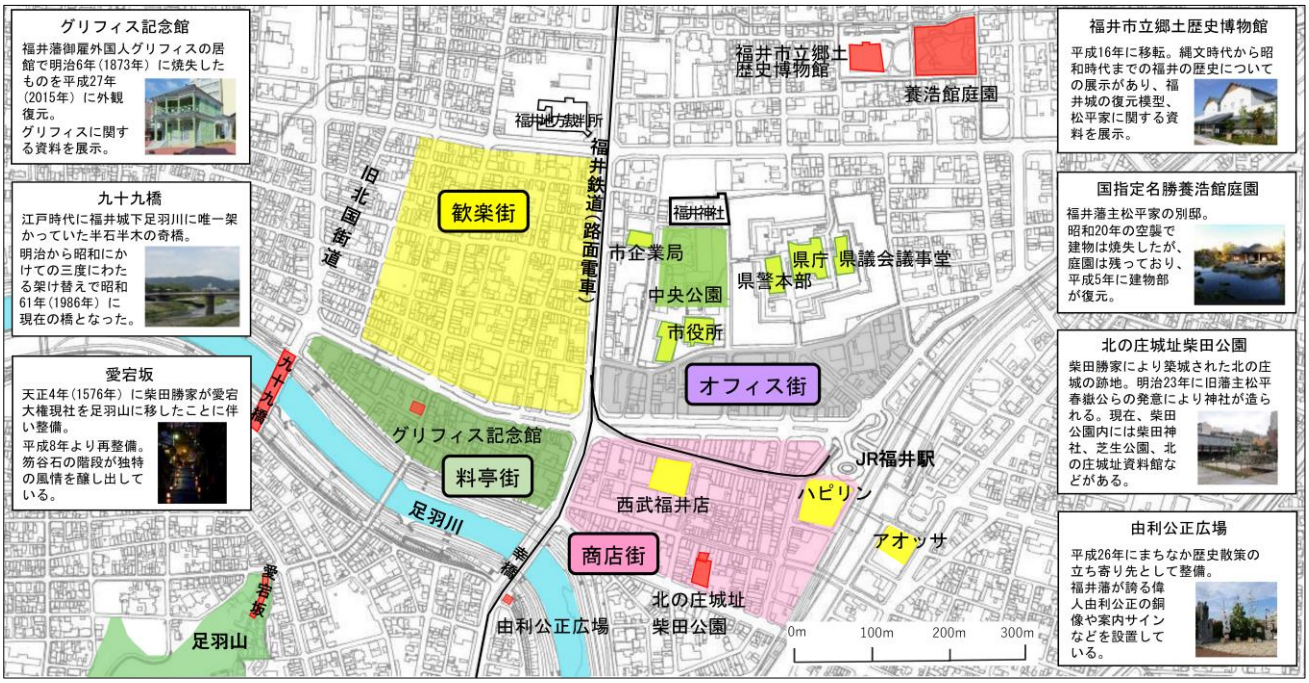
中央公園でのイベント

市道県庁線でのキッチンカー出店

前述したように、戦略に掲げられた城址周辺における短期～中期の整備については、これまでに概ね完了したが、福井城址の目指すべき長期的な目標の具体化を進める必要があることから、令和２年９月に、まちづくり、歴史、文化、景観、デザイン等の各分野の有識者や地元大学生で構成する「福井城址活用検討懇話会」が設置された。

一方で、福井商工会議所からの福井駅周辺地区のまちづくりに関する提言を受けて、令和２年７月に経済界、福井県、福井市による「県都にぎわい創生協議会」が設立され、北陸新幹線福井・敦賀開業に向けた観光コンテンツの魅力向上対策や、大阪延伸に向けた「県都のグランドデザイン」の策定について議論が進められている。

「福井城址活用検討懇話会」の提言は、「県都デザイン戦略」の方向性を受け継ぎ、「県都にぎわい創生協議会」における議論と整合を図りながら行っており、まちなかにおける「福井城址」の位置付けや求められる機能などについては、令和４年夏頃に策定予定とされている「県都のグランドデザイン」に反映させていくことが望まれる。



福井城址周辺の都市機能と歴史資源

■福井城址の価値と活用の考え方

福井城址は、交通の結節点である福井駅や県庁、市役所、商店街・オフィス街に近接するという全国的にも珍しい特徴を有している。

福井城本丸は、１６０６年に築城されてから廃城令により城郭が取り壊された後も、刻印やほぞ穴などが残る石垣や堀はほぼ形を変えることなく現存しており、往時の面影を偲ぶことができる歴史的価値の高いものである。

また、外堀に囲まれたかつての城郭内には、住宅街や商店街、オフィス街の中に養浩館庭園や復元された舎人門、百間堀の遺構などが点在しており、越前福井藩の政治の中心であった福井城の歴史を垣間見ることができる。

このように、福井城址は極めて歴史的価値が高く、県民の誇り、そして「県都のシンボル」となり得る大切な歴史資産であると言える。

福井城址の活用にあたっては、県民の愛着と誇りを育て、「県民の城」として意識されることが大切であり、その気運醸成を図っていくことが重要である。

その上で、特に、本丸や中央公園は、福井駅から近く、商店街やオフィス街、住宅街が接続する場所として、県民の生活にどう関わっていくと良いのかを考え、県民に愛され、誇りとして後世に受け継いでいきたくなるよう、デザイン性にも配慮しながら磨き上げていくことが必要である。

また、福井城址は、交通結節点である福井駅に近接し、中心市街地に近いという立地にあることから、２０２４年春の北陸新幹線福井・敦賀開業を控え、増加が見込まれる県外観光客にとっても、本県観光の玄関口として、魅力あるものとしていくことも大切である。

■目指すべき姿と目標年次

県民に城址の歴史的価値を理解してもらい、愛着を育み、生活の中に息づく「県都のシンボル」として後世に残していくため、福井城址活用の目指すべき姿を示し、北陸新幹線福井・敦賀開業に向けて短期に対応すべき活用方策と、「福井県長期ビジョン」の目標年次である２０４０年に向け中長期的に対応すべき活用方策を提案する。

◆目指すべき姿

（１）歴史に触れ、学びを深める空間

（２）人が集う、開かれた憩いの空間

◆目標年次

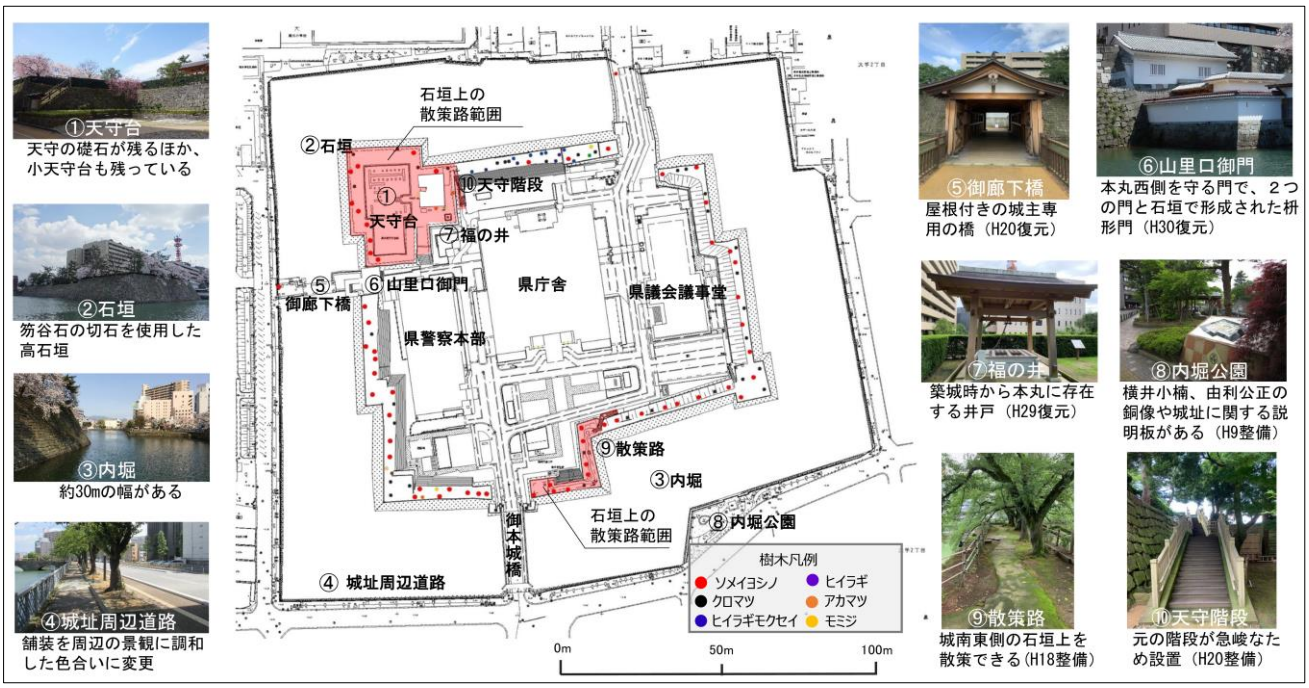
短　期	２０２４年	北陸新幹線福井・敦賀開業
中　期	２０３０年	
長　期	２０４０年	「福井県長期ビジョン」の目標年次

2　提言の内容

■福井城址活用の目指すべき姿と活用方策

福井城址活用の目指すべき姿（将来像）と、それらに対応する方向性を定め、短期（２０２４年）、中期（２０３０年）、長期（２０４０年）の具体的な活用方策を提案する。

【目指すべき姿】	【方向性】
（１）歴史に触れ、学びを深める空間	① 石垣・堀の保全と利活用 ② 城郭施設の復元 ③ 福井城址の歴史を知る・学ぶ機会の提供
（２）人が集う、開かれた憩いの空間	① 人が集い、文化を創造する環境づくり ② 緑豊かで開かれた憩いの空間づくり



福井城址の現状

（１）歴史に触れ、学びを深める空間

〔現状〕

福井城址には、築城以来４００年以上もの間、ほぼ形を変えることなく現存する石垣や堀があり、これらは往時を偲ぶことができる貴重な歴史資源である。

また、周辺には養浩館庭園や百間堀の遺構など歴史資源が点在しており、福井城址周辺は県民や来訪者が福井県の歴史に触れることができる空間であると言える。

しかし、戦災・震災からの復興の過程や都市の近代化により、それらの貴重な歴史が埋もれてしまい、来訪者だけでなく地域住民でさえ、本来の歴史を感じられる機会が減少している。

一方で、近年、「県都デザイン戦略」に基づき、山里口御門の復元、福の井の整備、御座所など埋もれている遺構を活かした中央公園の再整備などが行われ、歴史に触れる機会の創出が図られている。

〔活用の方向性〕

福井城址に現存する石垣や堀は、往時の姿を偲ぶことができる貴重な歴史資産であり、福井城址を「県都のシンボル」として、県民に愛され、誇りとして後世に受け継いでいきたくなるよう、磨き上げていくことが必要である。

そのためには、福井城の歴史について県民の理解を深め、地域の宝として誇るべきものとして認識してもらうことが重要であり、福井城址の活用にあたっては、県民の愛着と誇りを育て「県民の城」として意識してもらうために、気運醸成に向けた仕組みを作っていく必要がある。

まずは、築城以来４００年以上もの間、ほぼ形を変えることなく現存する本丸の石垣と堀については、適切に保全し、その歴史的な価値を知ってもらい、見てもらい、身近に感じてもらうなど愛着を高めることが重要である。

その上で、県民の気運を高めるための取組みを行い、県民に開かれた形で、坤櫓や城址西側土塀などの復元の検討を行っていくべきである。

また、福井城の理解を深め誇るべきものとして、県民が福井城について語れるようにすることも重要であることから、学ぶ機会の提供なども検討していくべきである。

〔具体的な活用方策〕

① 石垣・堀の保全と利活用　［短期～］

築城以来、形を変えることなく現存する歴史的価値の高い石垣や堀は、その形を損なうことなく適切に保全した上で、広くそれらを知ってもらい、身近に感じてもらうなど愛着を高める取組みを実施していく。

○石垣・堀の適切な保全

福井城の本質的価値である石垣と堀は、今後もその形を損なうことのないよう適切に保全していく必要がある。石垣の保全にあたっては、孕みが見られる範囲の観測調査などを今後も継続的に実施し、堀の保全にあたっては、日常的な水面の清掃に加え、アオコの発生対策などを実施していく必要がある。

本丸西側の石垣の状況

○石垣等のライトアップやプロジェクションマッピングの実施

現在、石垣の上部からスポット的にライトアップがされているものの、石垣を見てもらう上では十分な効果があるとは言い難い。石垣を知ってもらい、歴史的価値を認識してもらうためには、内堀外側からライトアップを行い、灯りに照らされた石垣と堀の水面を演出することが効果的であり、内堀の外周は夜間に非常に魅力的な空間となると考える。なお、ライトの色、照射角度、照明間隔、実施時期・時間など、デザイナーや専門家等の意見に基づき十分に検討する必要がある。

また、イベント的に、歴史をテーマにしたプロジェクションマッピング等を併せて実施することにより、福井城址に足を運んでもらい、石垣等を身近に感じてもらい、愛着を高めてもらうことが重要である。

○お堀での遊覧船運航などのイベント開催

本丸外周の内堀は、唯一埋め立てられることなく残っているものである。遊覧船運航などのイベントを開催し、石垣を間近に感じてもらい、本物の価値を認識してもらうことが重要である。石垣のライトアップやプロジェクションマッピング等とうまく連携できれば、相乗効果も大いに期待できると考える。

石垣のライトアップ（Ｒ３年春）

「お堀の桜舟」（福井商工会議所青年部）

② 城郭施設の復元

福井城址の本質的価値である現存する石垣と堀を適切に保全した上で、県民の気運の高まりをもとに、史料・文献調査を十分に行い、史実に基づいた復元可能な城郭施設の復元を検討する。

○坤櫓や城址西側土塀の復元　［短期～中期］

復元検討にあたっては、まず県民の気運の高まりが必要不可欠である。シンポジウムやワークショップなどにより理解を深めていくことはもちろん、例えば、県民から提供された材料で復元を行うなど、県民が参加する形で復元を進めることが重要であると考える。これにより「県民の城」として長く愛されるとともに、新しい文化・歴史のシンボルとなっていくと考える。

また、復元の検討にあたっては、現存する史料や文献調査を十分に行うことはもちろん、専門家だけでなく広く県民も交えて議論を行う必要がある。その際、外観だけでなく、内部の意匠や復元施設の活用方法についても十分に議論を行うべきである。

併せて、復元には多額の費用が必要となることから、寄付金やクラウドファンディング、企業版ふるさと納税の活用など、整備財源についても十分に検討すべきである。

なお、復元を行う場合は、山里口御門や御廊下橋との連続性、人が集う中央公園からの眺望や、福井駅からの来訪者視点を考慮すると、坤櫓や城址西側土塀から着手することが望ましいと考える。

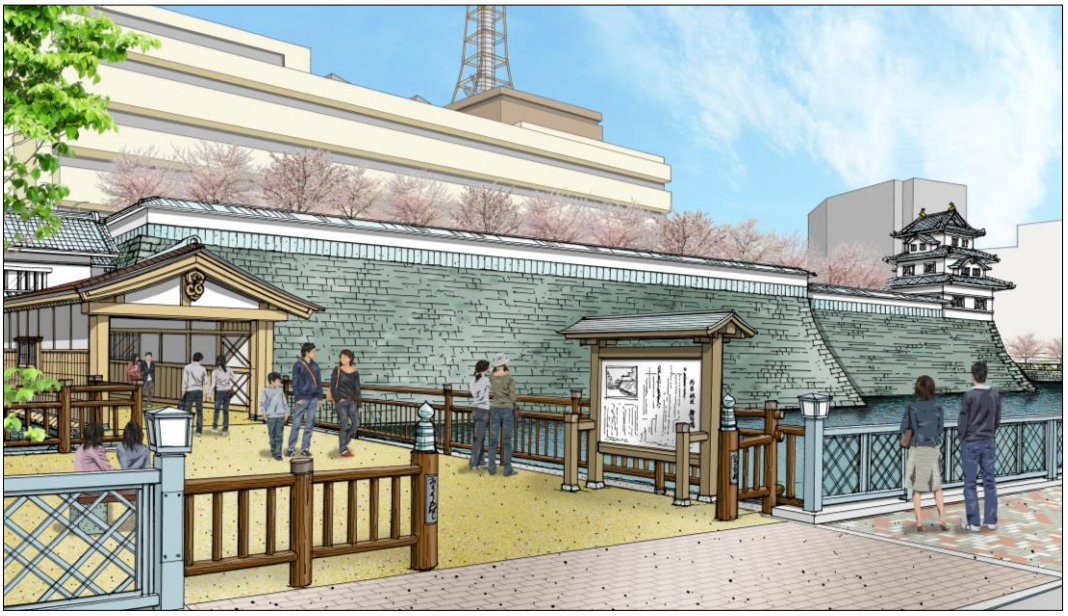
○巽櫓等の復元を検討　［中期～長期］

県民の気運の高まりのもと、坤櫓等の復元が完了した場合には、中長期的に、復元施設の活用状況も考慮した上で、社会情勢の変化や県民ニーズも踏まえ、巽櫓等の復元を検討していくことが望ましい。

坤櫓（絵図 福井温故帖 越葵文庫）
（福井市立郷土歴史博物館保管）

巽櫓（古写真 春嶽公記念文庫）
（福井市立郷土歴史博物館所蔵）

※１６６９年の大火により天守をはじめとする本丸の建物がすべて焼失し、本丸御殿や櫓、城門などは間もなく再建されたが、福井城の象徴でもあった天守はこれ以降も再建はされなかった。この際、坤櫓と巽櫓は２層から３層に変更され、福井城を象徴する建物として、天守の代用を果たしていたとされている。



城址西側からの坤櫓・土塀の復元イメージ

市道県庁線からの坤櫓の復元イメージ

③ 福井城址の歴史を知る・学ぶ機会の提供　［短期～］

福井城の理解を深め、誇るべきものとして、県民が福井城について語れるようにすることが重要であり、歴史を知ってもらい、学んでもらう取組みを実施していく。

○ＶＲ（※１）アプリの機能拡充、まち歩きの開催など学習機会の創出

福井城の往時の状況を知ることができる手段の一つが「福井城復元ＶＲアプリ」の活用であり、本丸内の城郭施設をビューポイントからＶＲ映像として体験することが出来る。このＶＲアプリを、面的に見られるようにすること、中央公園内や福井駅周辺でのビューポイントを増やすなどの機能拡充が必要である。

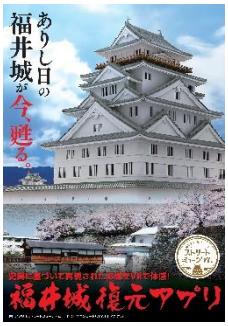
また、城址および周辺において、ＶＲも活用しながら歴史の専門家による解説付きまち歩きなどを開催し、県民が歴史に触れ、理解を深める機会をつくることが望ましい。

学校においても、福井城の歴史についての学習機会を設け、校外学習を積極的に実施するなど、子どもの頃から福井城の歴史に触れる機会を設けるべきである。

行政や各団体においては、福井城に関するまち歩きガイドブックやパンフレットの作成、講座の開催など、県民が歴史を知り、学ぶ機会を提供することが重要である。

「福井城復元ＶＲアプリ」

城への登城口である御本城橋から本丸御殿、天守、天守からの眺望など、本丸とそれを取り囲む厳選１０箇所をＶＲで再現。水堀に浮かぶその壮麗な姿を音声解説とともに楽しむことができる。また、現代地図の上に古地図を重ねて見ることができ、城郭内の建物の配置や旧町名など、古地図でしか知ることのできない歴史的背景も確認できる。



○ＳＮＳ（※２）やホームページなどによる情報発信の充実

福井城址の石垣や堀の歴史的価値や復元された御廊下橋や山里口御門は、県民に十分に知られていない可能性が高い。そのため、福井城を網羅的に紹介するホームページなどによる情報発信や、県民、特に若者と連携してＳＮＳを活用した情報発信の仕組みを設けることで、訪れてもらうきっかけをつくることが重要である。

ＶＲアプリツアー

福井城址の学習

○城址周辺の歩行者空間の拡充や案内表示の充実

福井城は、明治に入り外堀が徐々に埋め立てられ、現存するのは内堀のみである。そのため、現在の城址周辺は大きな道路に面しておらず、内堀を囲むように、遊歩道、散策路が設置されている。

勇壮な石垣や堀を「見てもらい、知ってもらう」ために、この特徴を最大限に活かすことが効果的であり、周辺の歩行者空間の拡充やカラー舗装化などを行い、歩きたいと思うような環境に整備していく。

また、案内表示の充実等も重要な要素であり、城址内や内堀外周だけでなく、周辺の歴史資源をつなぐ動線に統一感を持たせた案内表示や景観整備を行うことにより、周遊を促進する。

歩道案内タイル（鎌倉市長谷寺の例）

ビジュアルサイン（イメージ）

（※１）ＶＲ（Virtual Reality）
バーチャルリアリティの略で「仮想現実」のこと。人間の感覚器官に働きかけ、現実ではないが実質的に現実のように感じられる環境を人工的に作り出す技術をいう。

（※２）ＳＮＳ（Social Networking Service）
ソーシャルネットワーキングサービスの略で、友人・知人間のコミュニケーションを円滑にする手段や場を提供したり、趣味や嗜好、居住地域、出身校、あるいは「友人の友人」といった共通点や繋がりを通じて新たな人間関係を構築する場を提供するサービスのこと。ウェブサイトや専用のスマートフォンアプリなどで閲覧・利用することができる。ツイッター、インスタグラムなど。

（２）人が集う、開かれた憩いの空間

〔現状〕

現在、福井駅周辺においては、北陸新幹線福井・敦賀開業に向けて、複数の再開発事業などのプロジェクトが進められており、まちの風景が大きく変わりつつある。駅周辺は、県都の中心地として商業機能やオフィス機能の集積により、ビジネスや観光など、県内外から多くの人が集まり、活動し、にぎわいが創出されることが期待されている。

福井城址は、この県都の中心部に位置し、駅から歩いて行ける距離にある平城（ひらじろ）であり、このような地理的特徴を持った城址は全国的にも少ない。明治に入り、本丸以外の堀は徐々に埋め立てられ、かつての二ノ丸、三ノ丸エリアは都市開発により姿を変えてしまったが、本丸エリアと隣接する中央公園を合わせ広い公共空間を有している。

この中央公園の再整備によって、音楽イベントの開催やキッチンカーの出店など、公共空間の利活用が進みにぎわいが生まれてきている。

〔活用の方向性〕

本丸の外側に位置する二ノ丸、三ノ丸エリアもかつては福井城の城郭内であったことを認識し、城址の遺構を活かしオープンスペースとして整備された中央公園や周辺の養浩館庭園、舎人門などの歴史資源も含め、福井城址の活用を考えることが重要である。

福井城址を「県都のシンボル」として県民に愛されるものとするには、県民・市民にとって、身近に感じる開かれた場所に変えていく必要がある。

まずは、現存する石垣や堀に代表される福井城址の本質的な価値を知ってもらい、その歴史・文化に触れ、愛着を高めてもらうことが重要である。そのためには、人が日常的に集いたくなるようなイベントなどを開催し、その上で、城址周辺の緑や日陰を充実させ、訪れた人が気軽に憩い、安らぎ、城址の風情を感じてもらえるような環境づくりを進めることが必要である。

一方で、多くの人に訪れるきっかけをつくるようなスポット的なにぎわいを創出することも重要であり、非日常的な大型コンサートなどを開催することが効果的であると考える。

〔具体的な活用方策〕

① 人が集い、文化を創造する環境づくり　［短期～中期］

商店街、オフィス街、住宅街が接続する場所である城址および城址周辺に、誰もが集い、楽しみ、文化を創造することのできる取組みを実施していく。

○城址の風情を感じられるカフェなどの設置

中央公園など城址周辺に、魅力的で城址の風情を感じられるカフェやレストランなどを設置し、散歩中や昼休みに休憩しながら歴史を感じることのできる環境を整える。特に、復元された御廊下橋や山里口御門、先に述べた坤櫓や土塀（復元を検討）の位置する本丸西側の景観を眺められるような場所が効果的である。

店舗の設置にあたっては、公園等の利用形態に十分配慮した上で、常設する場合には、城址や公園などの景観にふさわしいデザインとなるよう十分検討がなされるべきである。また、移動可能なキッチンカーやコンテナハウスなどの仮設的な店舗でも十分な効果が望めると考える。

また、城址周辺のビル等を活用し、外から見る城址の新たなビュースポットを設置することで、今まで埋もれていた城址の新たな魅力を発信することも検討すべきである。

○フリーマーケットやコンサートなどのイベント開催

城址を身近に感じてもらい、日常的に人が集うような場所とするには、フリーマーケットなど、県民が誰でも気軽に参加できるようなイベントの開催が効果的である。特に、開催規模は小さくても、定期的に開催されていることが重要であると考える。中央公園はもとより、本丸内の県庁前広場（現在改修工事中）のほか、中央大通りや市道県庁線などの歩行者空間がイベントなどで有効に活用されることにより、福井駅や商店街などからの人の流れをつくるきっかけとなる。

また、県内外から多くの人に訪れるきっかけをつくることのできるスポット的なにぎわいづくりも重要であり、中央公園のオープンスペースなどで、野外コンサートなどの大型イベントを開催することも効果的である。

いずれのイベントも、単に人のにぎわいを求めるのではなく、城址という歴史・文化を偲ぶことができる場所という特性を十分に活かしながら、県民が参加し発表する場となるような企画とすることが望ましい。特に、大型イベントについては、非日常的な空間を一時的につくり出すため、普段は訪れない人が城址に訪れ、歴史に触れてもらうきっかけをつくることが可能となる。

キャッスルマーケット（中央公園）

ワンパークフェスティバル（中央公園）

○アートプロジェクトなど文化的活動の実施

アートプロジェクト(アートを活用したまちづくり)の実施や、文化的なイベントの開催、場所の特性を活かした芸術作品を地域の人を巻き込みながら創作するようなサイトスペシフィックアート活動などを後押しするなど、県民にとって、歴史を偲び文化を発信する活動の拠点的な機能を担っていく。

なお、恒久的に芸術作品を設置する場合などは、城址の風情に合うように、デザイナーによるトータルコーディネートを行うことが重要である。

○活用方策を議論・具体化できる場づくり

まちづくりにとって重要なことは、ハード整備などを担う行政だけではなく、まちづくりのプレーヤーとなる民間や地域が一体となって、計画段階から利活用を想定した上で具体化を進めていくことである。

福井城址についても、城郭施設の復元やその他の施設整備などの検討を進める際は、整備ありきではなく、具体的な利活用方法を十分に議論することが重要である。

そのため、地域住民や若い世代などを巻き込み、福井城址の利活用方法について日常的に議論し、具体化できるような開かれた場があることが望ましい。

② 緑豊かで開かれた憩いの空間づくり　［短期］

緑や日陰を充実させ、訪れた人が気軽に憩えるための取組みを実施していく。

○緑化や樹木などの日陰で休憩できるスペース設置などの環境整備

中央公園や城址周辺の緑化を推進し、歩いて心地の良い散策ルートの環境を整えるとともに、樹木の日陰となる場所にタープやベンチなどを配置し、誰もが気軽に休憩できる憩いのスペースを設置する。

本丸内については、見晴らしの良い天守台を最大限に活用することが必要である。ベンチや東屋の設置などにより休むことのできる環境の整備や、野点傘などを設置し茶会などの風情のあるイベントの開催により、本丸内の新たな憩いのスポットとして人が集い憩える場所になると考える。

中央公園の利活用のイメージ

３　将来的な活用の方向性

（１）将来的な活用の考え方

現在、福井城本丸内には、昭和５６年建設の県庁舎、昭和６３年建設の県警察本部庁舎、昭和４１年建設（平成１９年耐震改修）の県議会議事堂がある。一番新しい県警察本部庁舎は築３３年、県庁舎は築４０年であり、耐用年数（５０年）や福井県公共施設等総合管理計画から見て、今後相当の期間、利用可能な状況にある。

そのため、県庁舎等移転後の活用策については、２０４０年を目標年次とする活用方策に位置付けるのではなく、移転が現実的な課題となった時期における社会情勢のほか、城址周辺の土地利用形態や建物の状況などを十分に考慮して決めるべきものであると考える。

また、前述したように、福井城址は、１６０６年の築城以来、石垣と堀はほぼ形を変えることなく現存し、歴史的な価値が高いものである。そのため、城の歴史や価値など無形の資産を含めて活用方策を考えるべきである。

（２）将来的な活用の方向性

本提言では、将来として概ね２０４０年以降を想定し、県庁舎等移転後の跡地活用の検討の際の参考となるよう、方向性を提案することとする。

〔懇話会における各委員からの提案〕

懇話会においては、城址内の活用について、様々な提案がなされたが、大きく次の３つの意見に分類される。

①御殿や櫓、天守など「城郭施設の本格的な復元」

②城址という空間を活かしたデザインとする美術館や博物館など「文化施設の整備」

③歴史資源を活かし統一感のある雰囲気で集い、憩い、交流できる「多目的な利用を想定したオープンスペース」

〔留意すべき事項〕

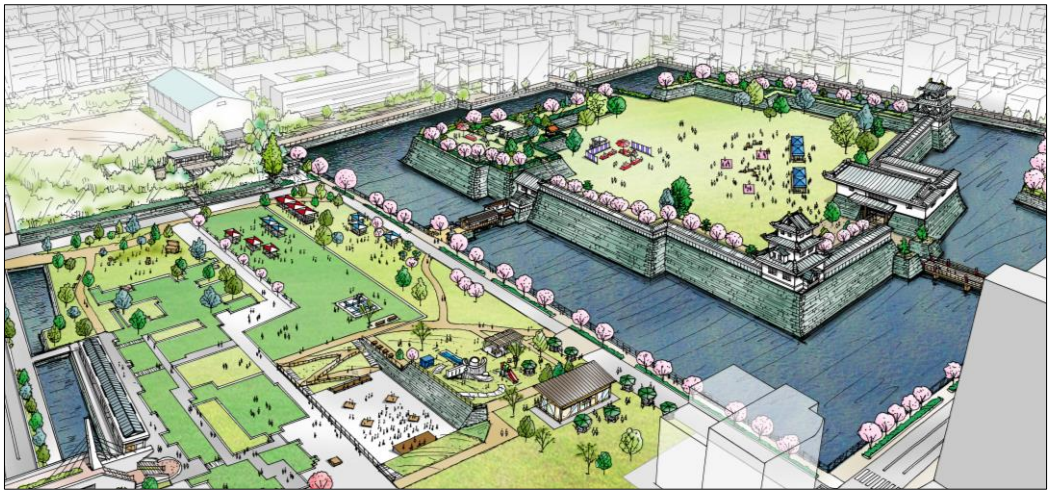
文化施設の整備にあたっては、福井城址は風致地区に指定されており、景観の保全を図るため風致の維持が必要であることに加え、将来的に城址周辺の建物の更新時期を迎えていく中で、土地利用の関係を考慮することも重要である。また、城址内に特定の建物を建設すると、相当の期間、土地利用が固定化されることについても留意が必要である。なお、城址周辺の土地利用については、将来的に城址活用を検討する際に、駐車場など低未利用地が増加しないよう、良好な市街地環境を維持することに努めることにも留意すべきである。

さらに、２０５０年を目標年次とする「県都デザイン戦略」においては、県庁舎、市庁舎を移転・再配置し、周辺街区と緑でつながる開放的な福井城址公園として再編するとされている。

〔活用の方向性〕

これらを踏まえると、福井城址は、歴史的遺産としての価値を一層高め、福井の歴史を偲び、誇りを感じられるシンボル的なエリアとして、商業的な賑わいとは一線を画して、歴史と日常の生活が結びついた開かれた憩いの空間を目指すことが望ましい。本懇話会としては、「多目的な利用を想定したオープンスペース」としての活用を大きな方向性とする。

将来的に、本懇話会で出された様々な意見を参考にしながら議論を重ね、福井城址の歴史的価値を活かした活用方策が検討されることを期待する。



（将来）県庁舎等移転後の活用イメージの一例